

[B年] 公現後第3主日(2023年1月22日)

【旧約聖書日課】民数記 9章15～23節

¹⁵幕屋を建てた日、雲は掟の天幕である幕屋を覆った。夕方になると、それは幕屋の上であって、朝まで燃える火のように見えた。¹⁶いつもこのようであって、雲は幕屋を覆い、夜は燃える火のように見えた。¹⁷この雲が天幕を離れて昇ると、それと共にイスラエルの人々は旅立ち、雲が一つの場所にとどまると、そこに宿営した。¹⁸イスラエルの人々は主の命令によって旅立ち、主の命令によって宿営した。雲が幕屋の上にとどまっている間、彼らは宿営していた。¹⁹雲が長い日数、幕屋の上にとどまり続けることがあっても、イスラエルの人々は主の言いつけを守り、旅立つことをしなかった。²⁰雲が幕屋の上になぞかな日数しかとどまらないこともあったが、そのときも彼らは主の命令によって宿営し、主の命令によって旅立った。²¹雲が夕方から朝までしかとどまらず、朝になって、雲が昇ると、彼らは旅立った。昼であれ、夜であれ、雲が昇れば、彼らは旅立った。²²二日でも、一か月でも、何日でも、雲が幕屋の上にとどまり続ける間、イスラエルの人々はそこにとどまり、旅立つことをしなかった。そして雲が昇れば、彼らは旅立った。²³彼らは主の命令によって宿営し、主の命令によって旅立った。彼らはモーセを通してなされた主の命令に従い、主の言いつけを守った。

【使徒書日課】

コリントの信徒への手紙一 1章1～9節

¹神の御心によって召されてキリスト・イエスの使徒となったパウロと、兄弟ソステネから、²コリントにある神の教会へ、すなわち、至るところでわたしたちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人と共に、キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々、召されて聖なる者とされた人々へ。イエス・キリストは、この人たちとわたしたちの主であります。³わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

⁴わたしは、あなたがたがキリスト・イエスによって神の恵みを受けたことについて、いつもわたしの神に感謝しています。⁵あなたがたはキリストに結ばれ、あらゆる言葉、あらゆる知識において、すべての点で豊かにされています。⁶こうして、キリストについての証しがあなたがたの間で確かなものとなったので、⁷その結果、あなたがたは賜物に何一つ欠けるところがなく、わたしたちの主イ

エス・キリストの現れを待ち望んでいます。⁸主も最後まであなたがたをしっかりと支えて、わたしたちの主イエス・キリストの日に、非のうちどころのない者にしてください。⁹神は真実な方です。この神によって、あなたがたは神の子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに招き入れられたのです。

【福音書日課】ルカによる福音書 4章16～30節

¹⁶イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。¹⁷預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある個所が目にとどまった。

¹⁸「主の霊がわたしの上におられる。

貧しい人に福音を告げ知らせるために、

主がわたしに油を注がれたからである。

主がわたしを遣わされたのは、

捕らわれている人に解放を、

目の見えない人に視力の回復を告げ、

圧迫されている人を自由にし、

¹⁹主の恵みの年を告げるためである。」

²⁰イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。²¹そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。²²皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて言った。「この人はヨセフの子ではないか。」²³イエスは言われた。「きつと、あなたがたは、『医者よ、自分自身を治せ』ということわざを引いて、『カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでもしてくれ』と言うにちがいない。」²⁴そして、言われた。「はっきり言っておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。²⁵確かに言うておく。エリヤの時代に三年六か月の間、雨が降らず、その地方一帯に大飢饉が起こったとき、イスラエルには多くのやもめがいたが、²⁶エリヤはその中のだれのもとにも遣わされなくて、シドン地方のサレプタのやもめのもとにだけ遣わされた。²⁷また、預言者エリシャの時代に、イスラエルには重い皮膚病を患っている人が多くいたが、シリア人ナアマンのほかはだれも清くされなかった。」²⁸これを聞いた会堂内の人々は皆憤慨し、²⁹総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。³⁰しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

民数記 9章15～23節

¹⁵幕屋を建てた日、証しの天幕である幕屋を雲が覆った。それは夕方になると幕屋を包む火のように見え、朝まで続いた。¹⁶常にそのようにあって、雲は幕屋を覆い、夜は火のように見えた。¹⁷雲が天幕から離れて昇ると、それと共にイスラエルの人々は進み、雲が一つの場所にとどまると、イスラエルの人々はそこに宿営した。¹⁸イスラエルの人々は主の命によって進み、主の命によって宿営した。雲が幕屋の上にとどまっている間、彼らは宿営し続けた。¹⁹雲が何日もの間、幕屋の上にとどまり続けることがあっても、イスラエルの人々は主への務めを守り、進まなかった。²⁰雲が幕屋の上に数日の間しかとどまらないこともあったが、彼らは主の命によって宿営し、主の命によって進んだ。²¹雲が夕方から朝までとどまるとき、朝になって雲が昇れば、彼らは進んだ。昼であれ、夜であれ、雲が昇れば、彼らは進んだ。²²二日でも、一か月でも、何日でも、雲が幕屋の上にあつて、その上にとどまり続けるかぎり、イスラエルの人々は宿営したまま、進まなかった。雲が昇れば、彼らは進んだ。²³彼らは主の命によって宿営し、主の命によって進み、モーセを通して示された主の命によって主への務めを守った。

コリントの信徒への手紙一 1章1～9節

¹神の御心によってキリスト・イエスの使徒として召されたパウロと、兄弟ソステネから、²コリントにある神の教会と、キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々、召された聖なる者たち、ならび至るところで私たちの主イエス・キリストの名を呼び求めるすべての人々へ。イエス・キリストは、この人たちと私たちの主です。³私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平和があなたがたにありますように。

⁴私は、あなたがたがキリスト・イエスにあって与えられた神の恵みのゆえに、いつも私の神に感謝しています。⁵あなたがたはキリストにあって、言葉といい、知識といい、すべての点で豊かにされたからです。⁶こうして、キリストについての証しがあるあなたがたの間で確かなものとなったので、⁷その結果、あなたがたはどんな賜物にも欠けるところがなく、私たちの主イエス・キリストが現れるのを待ち望んでいます。⁸主も、あなたがたを最

後までしっかり支えて、私たちの主イエス・キリストの日に、非の打ちどころのない者にしてください。⁹神は真実な方です。この方によって、あなたがたは神の子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに招き入れられたのです。

ルカによる福音書 4章16～30節

¹⁶それから、イエスはご自分の育ったナザレに行き、いつものとおり安息日に会堂に入り、朗読しようとしてお立ちになった。¹⁷預言者イザヤの巻物が手渡されたので、それを開いて、こう書いてある箇所を見つけられた。

¹⁸「主の霊が私に臨んだ。

貧しい人に福音を告げ知らせるために

主が私に油を注がれたからである。

主が私を遣わされたのは

捕らわれている人に解放を

目の見えない人に視力の回復を告げ

打ちひしがれている人を自由にし

¹⁹主の恵みの年を告げるためである。」

²⁰イエスは巻物を巻き、係の者に返して座られた。会堂にいる皆の目がイエスに注がれた。²¹そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。

²²皆はイエスを褒め、その口から出て来る恵みの言葉に驚いて言った。「この人はヨセフの子ではないか。」²³イエスは言われた。「きっと、あなたがたは、『医者よ、自分を治せ』ということわざを引いて、『カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでもしてくれ』と言うに違いない。」²⁴そして、言われた。「よく言うておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。²⁵確かに言うておく。エリヤの時代に三年六か月の間、雨が降らず、全地に大飢饉が起こったとき、イスラエルには多くのやもめがいたのに、

²⁶エリヤはその中の誰のもとにも遣わされなくて、シドン地方のサレプタにいるやもめのもとにだけ遣わされた。²⁷また、預言者エリシャの時には、イスラエルには規定の病を患っている人が多くいたが、シリア人ナアマンだけが清められた。」²⁸これを聞いた会堂内の人々は皆憤慨し、²⁹総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。

³⁰しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

- ・1月22日「公現後第3主日」の日課主題は「宣教の開始」。
- ・旧約聖書日課は、「民数記」から、モーセ率いるイスラエルの民に主が伴われたことを指し示す「雲」のしるしに関する伝承譚の箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙一」から、書簡冒頭の挨拶と助言の箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、主イエスが宣教活動の初期に故郷ナザレの会堂礼拝に出席された際の様子を伝える箇所。

旧約日課(民数記9章より)

- ・「民数記」は、ユダヤ正典「律法」の第四巻で、「出エジプト記」から始まる「モーセ物語」の第三部を構成する。本書は、「シナイ契約」後の「荒れ野の四十年」の時代を場面とするさまざまな出来事を伝えている。その書名のとおり、本書は、モーセ率いるイスラエルの民がどのような部族氏族によって構成されていたのかを提示することから始められ、約束の地カナンに入植した後に各部族が受けるべき嗣業の地を示すことで終わっている。ただし、嗣業地の提示は部分的である。「民数記」の物語「荒れ野の四十年」は、本書の示す年月表示により、三つに時期に区分される。①「シナイ契約」後、「シナイの荒れ野」を出発するまでの時期(～10:10)、②「荒れ野」の時期(10:11～19:22)、③カデシュから「モアブの平野」に至る時期(20～36章)。日課箇所は、第一区分の結尾に位置し、第二区分の「荒れ野の旅」を準備する記述となっている。
- ・日課箇所で示される「幕屋(ミシュカン)」≡「天幕(オヘル)」に関する伝承譚は、「出エジプト記」末尾(出40:34以下)に同様の伝承譚が置かれているが、これらは、「出エジプト記」の物語中で取り上げられる二つの伝承譚の内容が統合されたものと見ることができる。すなわち、「出エジプト記」13:21～22で示される「民の先頭を進む主のしるしである雲の柱と火の柱」の伝承譚と、同33:7節以下で示される「臨在の幕屋」の伝承譚のそれぞれの内容が、「出エジプト記」末尾および日課箇所では一つに結び合わされている。さらに「臨在の幕屋」は、「シナイ山」でモーセが主と会見した際に雲に覆われていた(出19～24章)とされた状態を、「シナイ契約」後の荒れ野の旅路においても継続するための「シナイ山」に代替する施設である。すなわち、「雲に覆われた幕屋」は、「エジプトからの逃避行に対する主の守り」と「シナイ契約」という「出エジプト記」の二つの中心主題を象徴する施設であり、それゆえに、「出エジプト記」25章以下でその造営方法が詳細に示されていた、ということになる。この「雲に覆われた臨在の幕屋」が民を先導することによって、この民は、あくまで主が示されるところに従って出立と寄留を決するという自己理解が示されるのである。

・「幕屋」および「天幕」と訳されるヘブライ語「ミシュカン」および「オヘル」は、「律法」各書において訳語が一定しないが、実際、明確な区別がされずに言い換えられる傾向がある。元来は異なる事柄を区別して言い表していたのではないかと推察する者もあるが、推測の域を出ない。

使徒書日課(Ⅰコリント1章より)

- ・「コリントの信徒への手紙一」は、「使徒パウロ書簡集」に収められた一書で、パウロが自ら創設に携わったコリントの教会共同体に宛てて記された一連の書簡の中のの一つ。おそらく、コリントに宛てた一連の書簡の中でも初期に記されたと推認される。パウロは、シリア・アンティオキアの教会共同体からバルナバを筆頭とする宣教団に加えられて派遣されていたが、ある時期にそこから離れて独自の宣教団を組織して活動を始め、新しい宣教地としてマケドニア州(フィリピやテサロニケなど)を示された。ところが、マケドニアで十分な成果が出せないままアカイア州に移り、アテネでも失敗した後にコリントに辿り着いた。コリントで、パウロらは、ローマから移住してきていたユダヤ人夫妻アキラとプリスキラの協力を得て、ようやく成果と言えるような教会共同体の形成に成功したのである。これは、アキラとプリスキラ夫妻を初めとする、すでに成立していたローマの教会共同体に属するメンバーの協力があったのであったと推認され、おそらく、この教会共同体創設事業を通して、パウロは、ペトロら「使徒」の指導下にある教会共同体と調停的な宣教姿勢に転じたと考えられる。このような事情が背景にあることを踏まえて、本書簡を考察する。パウロとコリントの教会共同体との関係については、過去の資料「聖書と祈りの会 221116」や「同 221214」なども参照。
- ・日課箇所は、本書簡の冒頭挨拶部分であり、実質的な内容に入っていないが、随所に、本書簡の背景にある事情が反映されていると考えられる。
- ・本書簡の宛先とされている者の表示は、他の「パウロ書簡」と比較したとき、異常なほど長大なものとなっている。すなわち、2節「コリントにある神の教会へ、すなわち、いたるところでわたしたちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人と共に、キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々、召されて聖なる者とされた人々へ」という長大な宛先名が記されているのは、他に例を見ない。ここには、パウロがコリントの教会共同体の人々をどのように位置づけようとしていたのかを示唆する内容が含まれている。
- ・「神の教会」という表現を、パウロは、本書簡および「手紙二」、「ガラテヤ書」、「Ⅰテモテ」で用いているが、日課箇所と「手紙二」1:1を除いて、これは具体的な地域に根差した教会共同体を指して用いられず、抽象化された全「教会共同体」を指して用いられていると考えられる。これを用いて、パウロは、コリントの教会共同体に対して、地域「教会共同体」にとどまらない共同体観を共有しようとしているのであろう。

・「至るところでわたしたちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人と共に」という修飾句も、「神の教会」と同様の意図を示していると考えられる。コリントの教会共同体は、パウロが去った後、アレクサンドリア(の教会共同体)出身のアポロや、ローマからアジアさらにシリアにかけての諸教会共同体を指導下に置いていたケファ(ペトロ)など、いくつかの異なる教会共同体の伝統が同居していた。それに並んで、パウロが示した少し過激とも言える徹底した福音理解も、一定の信者によって支持されていた。このような教会共同体の現実を踏まえて、パウロは、広く「主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人」という共通項による土台を提示しようとしているのであろう。

・「召されて聖なるものとされた人々」という表現は、「ローマ書」1:7 でローマの教会共同体に対して用いられる例があるだけで、他の書簡では用いられていない。むしろ、パウロは、「キリスト・イエスに結ばれている聖なる者たち」(フィリ 1:1、コロ 1:2、I テサ 1:1、II テサ 1:1)という表現を好んで用いており、日課箇所においても、9節「あなたがたは神の子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに招き入れられた」という言説によって、同様の趣旨を示そうと展開している。

・「交わり」はギリシア語「コイノニア」。「コイノス」は、「混ざりあっている状態」すなわち「汚れた状態」を指し、「聖なる(ハギオス)」の対義をなす。

福音書日課(ルカ 4 章より)

・日課箇所と重なる 14~21 節は、待降節第 2 主日の福音書日課で定められていた。資料「聖書と祈りの会 221130」も参照。今回は、ナザレの会堂で説教(勧め)をされた主イエスに対する人々の反応と対話、その後までが含まれている。

・この場面で、主イエスは、人々がご自分のことを褒めているにもかかわらず、皮肉めいた応答をして、人々の怒りを招いたように描かれている。実際に故郷でここに描かれるような激しい反発を受けたのかはわからないが、「迫害をきっかけとする宣教の拡大」という展開は「ルカ文書」(福音書および使徒言行録)で一貫して取り上げられる主題であり、その発端をここに見ているということかもしれない。ただし、23 節では、すでに主イエスがカファルナウムを拠点に活動の実績を残していたことが前提にされている。ここでの強調点は、主イエスが自分自身の故郷を捨てなければならぬということに絞って考えられているのかもしれない。

・25~26 節は、「列王記上」17 章にある伝承逸話。27 節は、「列王記下」5 章にある伝承逸話。「新約」において、「エリヤ」の名は、終末に再来する者として、また「洗礼者ヨハネ」の理解として、繰り返し取り上げられるが、「エリシャ」の名が挙げられて引用されるのは、この箇所のみ。共観福音書において主イエスの「皮膚病」の人に対する逸話は象徴的な意味を充てて描かれており、その予型として取り上げたのだろう。「やもめ」も「皮膚病」も、「異邦人」と重ね合わされている。

来週の誕生日 (1 月 22 日~28 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-361 番「この世はみな」(= I 90 番「ここもかみの」)は、19 世紀末米国長老派牧師モルトビー・D・バブコックの作詞で、原歌詞は 16 節ある。曲は 19-20 世紀米国で教会音楽家として活動したフランクリン・シェファードの作曲とされているが、原曲はイギリス民謡によるとされている。曲名の「TERRA BEATA」は、ラテン語で「祝福の大地」という意味。
- ・21-280 番「馬槽のなかに」(= I 121)は、20 世紀日本を代表する讃美歌学者であった牧師・由木康の代表作。初期に、「イエスの神性はその人性のうちに包まれ、それを通して輝いている」との神学的確信を得たことに基づいて著した詩を、1931 年版『讃美歌』で歌詞として採用。曲は、由木と同時代に東北学院、明治学院等で教鞭を執った教会音楽家・安部正義の作。
- ・21-416 番「神の民は」(= II-145「かみのたみは」)は、オランダの讃美歌作家オースターハウスの作詞。彼は、元カトリック司祭だったが離脱して活動を続けている。この讃美歌は、エキュメニカル聖歌集で発表された後、WCC 編『今日の新しい讃美歌』(1966 年)に再録、英語版から邦訳が作られた。

21-361「この世はみな」

THIS IS MY FATHER'S WORLD

1. This is my Father's world, / And to my listening ears / All nature sings, and round me rings / The music of the spheres. / This is my Father's world: / I rest me in the thought / Of rocks and trees, of skies and seas; / His hand the wonders wrought.
2. This is my Father's world, / The birds their carols raise, / The morning light, the lily white, / Declare their maker's praise. / This is my Father's world, / He shines in all that's fair; / In the rustling grass I hear him pass; / He speaks to me everywhere.
3. This is my Father's world. / O let me ne'er forget / That though the wrong seems oft so strong, / God is the ruler yet. / This is my Father's world: / why should my heart be sad? / The Lord is King; let the heavens ring! / God reigns; let the earth be glad!

21-416「神の民は」

Aan wat op aarde leeft

1. Aan wat op aarde leeft, geeft Gij hetzelfde brood.
En wie er U om smeekt, wordt met uw Geest gedoopt.
Geef ons dezelfde taal om uw Woord te verstaan.
Bewaar ons in uw hand, bewaar ons in uw Naam.
2. Wie in uw Vlees gelooft, geeft Gij uw eeuwig Woord.
Omdat Gij zijt gedood, bestaan wij altijd voort.
Leid al wie leven wil uw woning tegemoet
omwille van uw dood, omwille van uw bloed.
3. O Geest, die levend maakt en voegt het al aaneen.
Wij zijn verstrooid geraakt, maar Gij houdt ons bijeen.
Weersta toch aan de macht die onze harten scheidt,
o alvermogenend woord, o licht van eeuwigheid.